

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投函承認) 第三五二号
昭和四十六年一月二十五日印刷 昭和四十六年二月一日發行



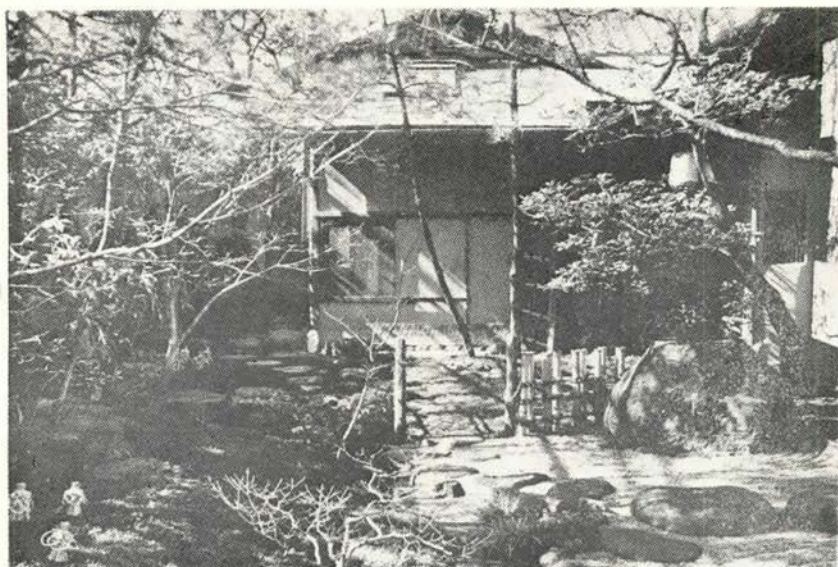
第三十七卷

第二号

1971

2

二 月 号



一 目 次

表紙「梅」松涛達文画

二百四十二年昔の五重相伝の巻物……………大 野 法 道……（2）

特集『家庭と仏教』

生き生かされる念仏の生活……………藤 井 正 雄……（4）

豊かな家庭……………伊 藤 正 穂……（8）

在家の信仰……………野 須 喧 雄……（10）

わが家の仲介者……………吉 川 邦 光……（11）

涅槃会によせて =現代の涅槃= ……………宅 見 春 雄……（13）

昭和法然上人伝(2)比叡山へのぼる・南都の遊学……………（18）

インドでの旅日記(7)……………佐 藤 治 子……（20）

水と念仏……………中 原 直 治……（26）

「道」(10) 吉水の庵室……………高 橋 良 和……（29）

法然上人の御影像をたずねて②……………宇 高 良 哲……（32）

語和声念



二月十五日

この号の原稿締切りの日、偶然にも、私のお世話になった旧家から、涅槃像を拙寺に寄進された。以後、大切に二月には、ねはん会に奉持拝観したいと思っている。昔は、多くの寺では、二月十五日になると、ねはん像の大きな画をかけて、拝ませた。もちろん、子供の時から私も、年毎に、眺めては、釈尊の偉大さに心打たれ畏敬の念を深めた事はない。

図の中でも、まわりの歎き悲しむお弟子の方々や、鳥獸たち、空から母なる人の投ずる妙薬の袋は、子供の心をとらえた。しかし、長じて、仏教の話聞いてみると、この図そのものが、すばらしい仏教の教を現わしている事に驚いた。

人々は、今や、大指導者、たよりとする人が、亡くなるのを悲しむけれど、ほんとうにたよりにするのは、お前達自身一人一人だと説かれている。親があり、友があり、位があり、富があっても、いざという時、ほんとうに悲しみと苦しみを受けとめていかなければならないのは、自分自身である。しかし、それと同時に、釈尊は、我亡き後は法をたよりとすべきであると言われた。法があつて釈尊があり、釈尊が、死なれた後も、永く存在する永遠の真理（法）がある事を図は語っている。釈尊は、よみがえらない、亡くなるのである。しかしこの死というものが、そのまま、仏教の一つの旗じるしである諸行無常の法を説法するともいえる。釈尊の死を示す事により、逆に、あらためて、その法の永遠であり、不滅である事を確かめている。

我自身をよるべとする事は、法をよるべとする事によって、全うされる。我、法と共にあり、我、法と共に生きる、という自覚を、ねはんに入るに当って説かれたのである。おろかな私も、念仏の法に生かされ、念仏の声に、仏は在す。

（真野竜海）

二百四十二年昔の五重相伝の巻物

大野 法道

(大本山光明寺法主)

思えば昨年十一月十八日でした。その日は、神奈川県の小田原組では、市の公会堂で開八の文化講座だったので、未曾有の張り切り方であつた。前以つて気象庁に連絡して天候に自信をもち、従来 of 寺院に閉じこもる形からぬけ出して、大ホールの中央に法然上人の巨像をかかげ、その左右に現代語の標語を張り、壇上は簡単な莊嚴で、音楽法要であり、一枚起請文を来会者一同と奉読し、同声十念した感激は、今更の如く心腑に徹したであらうと思う。表題の二百四十二年昔の五重相伝の巻物は、それが終つて控え所に於いて出会つたのである。

当日来会者の一人に、遠藤某が来られて、これは私の先祖が、光明寺の上人から頂いたものでありますが、今日は光明寺様が来られるというので、見てもらおうと持参しました。

と、いかにも珍妙なものを携えて来たような様子であつた。

それを手に取つて拝見すると、確かに浄土宗で伝授する五重相伝会に於いて受者に授け

る巻物であり、形式も現今のものと同一である。が異なるのは、

享保十四己酉歲閏九月十五日

天照山光明寺五十八世伝燈仏子義譽書判

とあるように、その時の年次と、伝燈師の署名である。

そこで、之は義譽観徹上人のものであり、まさしく五十八代の寺主であること、貴家系の相続によって古伝法書の今に伝襲されること、晨朝礼讃に「浄国には衰変なし、一たび立って古今に然なり」とあるように、私たちの往生する浄土は、一たび阿弥陀仏の本願成就で打立てられた世界であるだけに、そこへの念仏は、昔も今も変わりなく、この巻物の導く力の一つであることなどを語り、之は珍しい法宝であること、などを告げて訣別しました。

伝燈師の義譽上人は、実名を観徹と申します。京都の人で、業成るの後、増上寺の雲臥大僧正に招かれて、小金東漸寺の学頭となり、正徳二年に江戸崎大念寺へ、五年に瓜連常福寺へ、十一年に鎌倉光明寺へ晋山された。この五重の翌々年の享保十六年十二月十八日に、世寿七十五歳で入寂されたのである。天資篤実にして厳格、道心化導盛んであったと伝えられている。著作に、三部経合讀七卷、円頓戒誘蒙一卷（常福寺時代の作）智光・清海曼陀羅合讀各一卷がある。

享保十八年の三回忌の時に、円戒誘蒙が出版されたが、その跋文に記されるところでは、観徹上人は青年の頃、京都獅子谷の忍濃師（正徳二年寂）に増上寺で会い、師から、円頓戒を究めなければ宗意は徹底しない、と言われるのを聞いて発奮し、師について受戒されたと記している。行誡上人の伝法復古にも、江戸時代の注目すべき人々が挙げられる中に、鎌倉の観徹の名が見えているほど、有数な人と言わねばならない。

特 集

家庭と仏教

藤 井 正 雄

(大正大学助教授)



生き生かされる念仏の生活

昨年の暮にアメリカ人の家庭を訪問する機会をえまして。夏休みに我が家を訪ずれて、家族ともども、江戸川の川畔で思い切り飛びまわって遊んだ返礼としてクリスマスに招待されたのでした。夏の一日を共にしてすっかり友達になった二人の子供たちにせがまれて、小雪まじりのうすら寒いなかを出掛けたのですが、下手な英語と慣れない慣習の違いにとまどいながらも楽しい一日を過

ごしました。クリスマスという異教徒の祭りに無関係な私にとって、クリスマスの行事そのものとは別に、家族同志の交歓のなかに「家庭のあり方」について考えさせられた一日でした。

私たち家族とは別にもう一組のアメリカ人家族が招待されていて、三家族が一つ屋根の下に数時間を過ごしたのですが、子供たちは初対面の二人の友達に対してすで

に夏を楽しく過ごした三人の友達を橋渡しにして、うちとけるのにあまり時間はかかりませんでした。まもなく始まったゲームに興ずるなかに、英語を知らない私たちの子供は日本語で、訳も分らない英語とやりあっていた。アメリカ的躰けをまざまざとみせつけられたのは、そのうちに招待されていた家族が帰ることになったときのことでした。二人の子供は、ママが帰りますよという言葉にもう少し遊んでいたいと言言三言抵抗を試み、また他の子供たちも応援しましたが、ママは何故帰らなければならぬのか、四時には客人があることなどを説明しますと、子供たちは納得し、二人はすぐに「メリ・クリスマス・アノド・ア・ハッピー・ニュー・イアー・グッバイ」といって帰っていききました。

○
アメリカの文化人類学者ベネディクトは、アメリカと日本の文化を比較して、日本の文化は西欧の罪の文化に対して恥の文化であることを指摘しております。両文化の相違は、キリスト教団にある西欧においては、行動の基準が神にあり、日本においては人にあるといえることができるでしょう。したがって、子供の躰について

は、子供がいたずらしたり他人に迷惑のかかることをしたばあいには、人前で「たとえお客様の前でも」子供にわかるように説明してその行為を止めさせるでしょう。ところが、絶対的な神という行動基準ではなく、他人の目を行動基準とする恥の文化においては、そんなことをすると「はずかしい」とか「笑われる」と子供をたしなめることになると思います。あるいは、その時は子供を叱らないで、子供を「いい子だから」とおだてたり、あるいはあとでこっぴどく叱るでしょう。そんなとき、子供は自分のした行為をすっかり忘れていますから、なぜ叱られるのかピンとこないで仕方なく「今後」はしませんが」とあやまっておちになるといえます。

○
この両文化にみられる躰の相違は、極端にベネディクトにかこつけて述べたのですが、一概に否定することのできない一面を伝えているといえないでしょうか。権力にこび、自己の正しいと思う信念を貫き通すことができずに、「泣く子と地頭には勝てぬ」事なかれ主義の人々があまにもおおいのが現状だといってもよいと思います。もちろん、冒頭にだしたアメリカ人の家庭は標準と

はなりませんし、日本人の家庭がすべて、そうだといっているわけではありません。今日ある日本の状況は世界的現象であるともいわれています。アメリカの社会学者リースマンは、ベネディクトの主として幼児期の躰と結びつけた「罪の文化」「恥の文化」の二分法を出発点として歴史段階説を展開した学者ですが、社会的性格を三つの類型に分けて、現代人は「他人指向型」性格が支配的であって、「伝統指向型」や「内部指向型」性格の人間は過去のものとなりつつあると指摘しているとおりです。

○

三兆円という空前のボーナス景気で沸いた七〇年は、物的繁栄のかけに家庭の悲劇がかくされていた年でもありました。「夫が家出して」「あまり泣きさげぶので」「そうをしたから」「勉強をしないから」……と突におおくの、またあまりにも簡単な理由で、子殺しが相ついで起ったのは記憶に新しいところです。昨年の八月市川で生まれたばかりの赤ん坊が首だけだして、川原に埋められたり、九月には福島県白河で映画館で生んだ女兒を走る列車の窓から投げ捨てた……など、まさに言語同断の到底考えられないような人間不在の事件の連続でした。そ

れはまさに「罪の文化」「恥の文化」のいずれの範疇にも入れることのできない躰以前の、本能のままに動く動物にも劣る人間の出現といえるでしょう。しかも彼らには人間不在と同時に宗教不在でもあることに注目したいと思います。

○

ブツダが最後に残されたお言葉は「自灯法灯」の教えでした。まさに火の消えるように涅槃に入られるブツダが、悲嘆にくれる阿難に対して、すべてのものは生れながらに仏となる本性、すなわち仏性をもちつづけて一時もなくなることはない。ブツダなきあとは、ブツダの残された真理「法灯」をよりどころにして如来の道を歩むならば必ず仏の境地に至ると説いたのです。仏教信仰とは法をよりどころとして自己をみがくことにほかならないといえます。すなわち、仏教は他人指向型の人間形成をめざしているのではなく、自主的な人間形成をめざしているのです。現代こそ仏教信仰が要請されるべき時代はないといっても過言ではないでしょう。このことは、家庭にあっての躰がそれぞれ子供の持ち味を生かす道をさし示しているといっています。伝教大師

のいう「一隅を照らす」とは同じ意味です。

持ち味を生かすとは、阿弥陀經に「青い色には青い光があり、黄いろい色には黄いろい光があり、赤い色には赤い光があり、白い色には白い光がある」と説いてあるように、お互にそれぞれの個性を生かし伸ばして、尊びあい、他をみて自身をみがき、生かされて生きる調和した社会を築くことであり、その境地は浄土の心であるといってもよいでしょう。

○

調和した社会の単位は家庭にあることはいうまでもありません。常不輕菩薩は、氣狂いともいわれながらも、一切すべての人を礼拝したと伝えられています。合掌するとは敬順をあらわし、拝むとは己をむなしくすることです。ともに喜び、ともに悲しみ、ともに励みあい、ともに慈しみあうのが家庭であると思います。親子・夫婦・兄弟が、親だから、夫だから、兄だからと権利、権威をふりかざしては話しあい場とはなりません。もちろん、世にいう女上位でも、子供を甘やかすことをいっているわけではありません。初対面の人でも、話しているうちに、その人の持ち味がだんだん分ってきて、すっ

かりうちとけることがあります。お酒を飲まなくては本当のお話はできないとよくいいますが、それは人間がうわべだけでは分らない存在、すなわち内なる心と外にでた心とが合致していない内外不相応の存在があることを示すものです。念仏は元祖法然上人の示された還愚の念仏、すけささぬ念仏ですから念仏する態度で人にあい、仕事をし、紙でもエンピツでもどんな小さなものでも粗末に扱わない拝みあいの生活は、すべてのものを生かしていると同時に己を生かすことに繋ってまいります。

○

幸にして、西欧人が日本人はそれぞれの家庭に小教会があると讃嘆したといえますように、家庭には仏壇があります。仏壇は、今様にいうならば、家庭生活の統合のシンボルであるといってもいいでしょう。拝みあいの生活をまず家庭のなかから実行していき、同信の輪を池に投じた小石が水の輪を次々とひろげていくように、次第に社会に及ぼしていきたいものです。信仰は一器の水を一器に移しかえていくように、まず己からはじめ、他に地道に及ぼしていかなくてはならないからです。それはとりもなおさず自己を生かす道でもあるわけです。

生けらば念仏の功つもあり

死なば浄土にまいりなん、

とてもかくても此の身に



今日では伝統的な家族形態が崩れて、いわゆる核家庭化が進みつつありますが、この現象は、それ故に、すなわち、親子が別居するということの故に、悪とされる風潮があるようでありますが、このことは、むしろ、そのような現象以上に、親子、兄弟、一人一人がどのような心がまえで生活しているか、ということによるものと、考えられます。

同じ屋根の下、同じ釜の飯を食べ、同じ血を受けた親

思い煩うことぞなし。

元祖法然上人の御歌が如実に家庭生活における信仰のあり方を示してくれています。

豊かな家庭

= 同朋大学講師 =

伊藤 正 穂

子、兄弟であっても、また同じ床にある夫婦であっても、お互いに心が通わなかったならば、決して、円満な家庭生活を営むことはできないでありましょう。これとは反対に、時間的にも遠く離れ、空間的にも場所を異にしたり、また血縁的にも何ら関係のない人と人との間であっても、本当に心のかようとときには、お互いに、暖かい心境を味わうことができるのでございます。

私は、八年有余、北米の浄土宗別院開教使として、か

の地に滞在し、任務を終って祖国に帰り、生れ故郷の実家に帰ったとき、私の写真が床の間に飾ってあるのに気づいたのであります。これは私が渡米するとき写したものでありましたが、私の老いたる父が床の間においたのだと聞かされました。どうしてそうしたのかは問わずも、私はそれを見たとき、一瞬、あついものを胸に感じたのであります。たった一枚の、この写真を見たとき、私は、日頃何一つ小言をいわない父が、遠く離れて赴任しているわが息子の上に、健康であれ、幸いあれと心ひそかに祈っているその姿を思い浮かべたからであります。耳には聞えず、目には見えないながらも、きつと任務にいそしんでいるであらうわが子の達者を願う親の心に、私は深く感動させられたのであります。これは、時間、空間を超えた心の世界であつたのでございます。

家庭生活を豊かにするには、物質的、経済的要素が重要であることはいふまでもありません。しかし、この二つはまた、人間の欲望を永遠に満たすことなく前進して行くものであり、これでよいということはあまりないようです。今日の貧乏は終戦直後の物質的にも、経済的にも、絶対量の少なかったときの絶対的貧乏とは異

なつて、相対的貧乏だといわれております。「隣がカラーテレビを買ったので、うちでも買わなければ」とか、「友人が新しい自動車に買いかえたので、自分も買いかえなければ」といった類の貧乏であります。物質的、経済的豊かさは、永遠に追求されて、あくことを知らぬものであります。

しかし、たとえ、物質的、経済的に豊かになつても、そのままが家庭生活の豊かさを意味するものではないであります。物質的、経済的には、一般より恵まれた家庭から非行少年がよくでるといわれているのは、このことを物語っているといえましょう。また、持てることが、かえつて親子、兄弟、夫婦の争いの種となることもよく伝えられているところであります。

われわれは、家庭生活の豊かさについて語る場合、とかく、物質的、経済的な豊かのみを念頭におきがちであります。たとえこの二つが揃っていたとしても、お互の心が通じ合わなかったならば、果して、本当の意味で豊かさを享受することができるのでありますうか。

私たちは人生を送っております間には、色々の悩み、苦しみにあいますが、中でも人と人との間に心の触れ合

い、精神的融合がないこと程、大きな悩みはないのではないでしょう。

私は、たとえいかなる外的諸条件が揃っていたとしても、これらを本当に生かし、明かるとい、豊かな家庭を築きあげるためには、この心の通じ合うということが、重要な要素であると常日頃感じているのでございます。

ときをこえ、場所をこえ、身体をこえて、すべてに通

野 須 喧 雄

(神奈川県小田原市在住)

在 家 の 信 仰

ずる世界は、またすべてのものを結ぶ世界でもあり、真の平和な、やすらいの世界であります。

私たちは、いま一度、心の世界の導きを自覚し、反省と相互の深い理解のもとで、明るとい、豊かな家庭生活を送るべく努力したいものでございます。そこにはじめて一如の世界、「俱会一処」の世界が開かれてくるものと思われるのであります。



念仏信仰といわれる程にはつきりした信仰を持ってい

るわけでない。親の代から朝起きれば必ず仏壇に向って合掌していることも、半ば習慣的になつていゝことで、特にそれだから信仰があるという意識を持ったことはない。しかし日常の生活を省みて、私は私なりの信念がな

いでもない。

第一には生命の尊重というか、毎日の生活を有難いものとして暮している。掛け替えない人生であると思ふことから、また報恩感謝の気持がわいてくるのでなからうか。

第二には努めて自慢するような言葉を用いないようにしている。それと同時に他人の悪口をいわないようにしている。他人のことを批評する前に己れを知るといふ心掛けを持っているつもりである。

第三には生活をできるだけ明るいものにしたいと思っている。ものはいいようであるといわれ、何事も考え方が一つであるともいわれているが、すべてを明るい方向に考えるべきであると思う。たとえば仕事が上手に進まな



わが家の仲介者

吉川 邦光

(山梨県甲府市在住)

私たちの平凡な日々の生活をささえる大きな力、それは家庭内の和であると常々思っております。いかに多く、いかに名声高くとも、一步家庭に入れば親子がいのみ合っている、こんな家庭は人生の敗北者であることを

いつでも、好意が裏切られた時でも、自分に対する悪口が耳に入った時でも、明るい方向に考え直すという努力は容易でないことがある。しかし容易でないからこそ、あえて努力しているという意識を持っているつもりである。このような二、三の心掛けが、信仰とどう結びつくのか、信仰のある生活であるといえるかどうか知らない。しかし日常の生活態度は仏さまを拝む気持と同じ気持であるべきだと考えている。

考えているからです。親と子供、祖父母と孫が互いに信頼し合い、共に助け合ってこそ、たとえその生活が質素でありまじしくとも、こんなにしあわせな家庭はないと思います。

しかし、人々は我が子かわいさのあまり、どうしても自分中心の考えが強くてしてしまうのが現実です。ちょっとした仲たがいから、大きな家庭不和へと進んでしまうのです。それは家族が一番ときを共にする時間が多すぎるためでもあります。また、一番わがままをいえる間でもあるからでしょう。たとえ知人と仲たがいしたとしても、会う機会さえつくらねば、その一時の悪感情はときが解決してくれることも、ままございます。

けれど家庭内では、そうしたときがありません。いかにくやしくても、いかに苦しくとも顔をあわせねばならないからです。

こうした折、その間に入って仲介してくれるものが必要となってくるのです。誰からも、なるほどといわれるものがが必要です。飛躍したい方になります。私の家庭でこのなるほどと納得させる仲介人が、仏教なのです。その教えは永遠のものであり、易しくもあり、また難しくもあります。ある時は、激しくつきはなされますが、またある時は、やさしく手をさしのべてくれるからであります。幼稚園に通う孫には、それが何人であるかわからないが、小さな掌を合せることによってつちかわれ

るであろう敬いの心をもたせる仏教、中学に通う孫には、試験の出来不出来の最後のたのみとなる仏教、過日結婚した末息子には、第二の人生の門出となった結婚（仏前）の場となった仏教、家計を負う長男夫婦（小物商）には、商売が繁昌するようにとの心のささえとなっている仏教、そして今は余生を送る私には、より平穏な日々を送れるようにと願う私の伴侶となって心にやすらぎを与えてくれる仏教、それぞれその信ずる心持は違っても、その違いに何ら差別なく手をさしのべてくれるのが仏教なのでございます。

あまりにもきれいなことばを並べたように感じる方もあるとは思いますが、これとて信じるか否かの深淺によつておのずから決ることでしょう。仏の教えは多くの人々を含みこむ、大きな力があると思います。この大きな力を利用しなくては、それこそ一生の不覚といつても過言ではないというのが近頃の心境でございます。

繰返しますがひと一人のしあわせは家庭の和から始まるのです。その和が大きな輪となつて、より良き社会の輪となり、やがて誰でもがしあわせになるであります。う大きな和、平和な世の中ができるものと思います。

涅槃會によせて

現代の涅槃

宅見春雄

(仏教大学教授)

一)

毎年新春を迎えて正月も終り二月に入る頃ともなると、仏教徒にとって記念すべき日がくる。二月十五日には多くの寺院において釈尊の成道会がいとなまれ、そのご入滅の昔を偲ぶのであって、この成道会の行事はわが国において古くから修せられたもので、釈尊ご入滅の忌日にあたつて涅槃像または涅槃図を拝して遺教経を誦する儀式を行うものである。

今からおよそ二千数百年以前にインドのクシナラの地で釈尊が入滅せられたと伝えられている。学問的にその入滅年代が論ぜられてきているが紀元前四五世紀の古い昔のことである。

ただひとり阿難を供につれてパーパーという村で説法した釈尊は、病にかかれ最後の土地となるクシナラの町を目ざして旅を続けられた。ながい旅路も終りとなり、ようやくクシナラの郊外につき沙羅の木の中に入って阿難に床をとらせ病身を横たえられたのであって、ながい伝道の旅も終りをつけることとなり、ここで安らかな涅槃に入られた。その臨終には多くの弟子や信者にかこまれ、涅槃図が示すように生きとし生けるもの、すなわち動物たちにさえとりかこまれて静かに永遠の眠り

に入られたのであって、その時八十歳であつたといわれている。

この静かな涅槃の姿を思いうかべるとき、思想宗教というものは教祖の性格があらわれるものであることに気付くのである。静寂すなわち静けさそのものともいうべき最後のお姿を考えると、釈尊のとかれた仏教が静けさを内容としておだやかな中道を説いていることが明らかとなる。三法印のなかに諸行無常・諸法無我とともに涅槃寂靜を大切な言葉としてもつことも大きな意味がある。

さて、涅槃すなわち梵語のニルバーナという言葉は、吹き消すこと、あるいは吹き消した状態を意味するものである。ちょうど灯をフツと吹き消したとき、今まで輝いた光が突然消えて闇黒となることをいうのである。光りとして存在した釈尊が灯を吹き消すごとく生命を終られたことは、指導者としての釈尊の姿をこれ以後仰ぎみることができなくなった弟子や信者にとって、まさしく光から闇へと考えたものといえる。

原始經典によると釈尊は晩年に次のように語られたと記録せられている。

「私の年は熟しました。私の余命はいくばくもありません。あなたたちをすてて私は行くであります。あなたたちはよく戒をたもちなさい。おのれの心をまもりなさい。法と律にとつとめはげむものは、生の流転をすてて苦しみの終末をもたらずのでありましょう。」と弟子たちに言葉を残されたのである。

また臨終に際して「私は二十九歳で善を求めて出家しました。出家してからもう五十年以上になります。そして法の世界ばかりを歩いてきました。これ以外にはみちの人たるものはありません。」と自らを語られたのである。そして最後に「弟子たちよ。ふしだらな生活をしてはなりません。つとめはげみなさい。」と教えられたというのである。

このように釈尊の涅槃をふりかえるとき、思い出されるのは法然上人の最後のお姿である。七百五

十有余年の昔、すなわち建暦二年の正月に病の床につかれた法然上人も、多くの弟子や信者のあたたかい看護につつまれて同じく八十歳でこの世を去られたのである。その教えは浄土の教えとして人々に静かなおだやかな宗教生活に入ることを説かれたのであって、その最後の姿に釈尊のそれと全く同じものを感じざるをえない。

病床にあった法然上人は「私はもと極楽浄土にいたのでありますから、その浄土へ帰って行くのであります。」と弟子に語られ、また「私の遺跡を一カ所に限りましたら法は弘まらないうであります。私の遺跡は地方々に満ちております。何となれば専修念仏の行いは生涯を通じてのつとめでありますから、念仏の声のするところは貴いも賤しいものとわず、あま漁師の海辺のささやかな家までも、みな私の遺跡であります。」と教えられた。

この晩年の法然上人の言葉を釈尊のそれと比較するとき、全く同じことを教えられていることを知る。念仏は生涯のつとめであるといわれ、念仏の声するところは私の遺跡であると語られたことが、すなわち釈尊のいわれた真理の道を歩み自らをよりどころとして努力精進すべきであると教えられたことと同じものであると思うのであって、二人の聖者の涅槃にむかう最後の言葉として有難く拝するのである。

(二)

このように古い釈尊の涅槃と法然上人の晩年を偲んだときに、新しい涅槃とはいかなるものであるかを考えざるを得ない。人はみな涅槃をもつものと考えられる。言いかえるならば涅槃の心境をもちうるのである。これが仏性があるということとなるといえるのであらう。

インドの哲人政治家といわれたネール首相がその死の十年前に妹のパンディット女史に遺言を残し

ている。そのなかに「私の遺骨の一部はアラハバドでガンジス川に投げいれてほしい。それが海に流れこみ、インドの大地を洗うように。」といい、「多くの遺骨は飛行機で空高く運び、そこからインドの農民が働く野原にまいてほしい。遺骨がインドのチリと土にまじり、インドそのものの一部となるように。」とあって、それが実行せられたと伝えられたのである。

人はこれを極めてインド的であると考えられるかもしれないが、これはガンジスへの愛情・インドへの愛情であるとともに、ネールの涅槃であると考えられる。

また、ガンとの闘病生活を続けつつ近代文学館設立につとめその文筆生活を終られた詩人高見順氏の遺稿ともいべき詩集「死の淵より」のなかに氏の涅槃をすることができ。

そのなかの詩「巡礼」にインドの蓮の花を「まさに極楽の花であり仏とともにあるべき花だ。それが地上に存在するのだ。涅槃がこの地上に実現したように。おおいま私は見る。涅槃を目ざして。私の人工食道の上をとぼとぼと渡って行く巡礼を……。」とあり、また詩「帰る旅」には「大地へ帰る死を悲しんではいけない。肉体とともに精神も。わが家へ帰るのである……。」とうたっている。

この詩は宗教であり仏教である。それを読むとき、釈尊の法話を聞き法然上人の聖句を誦誦したときと同じ感激をいただくのであって、現代の詩人の心のなかに涅槃をみるのである。

また、去年の終りに近くある新聞の投書欄に心うたれる一文をみたことがある。それは初老の一主婦のもので「安楽死が許されたら」と題し死後の心細さに一つの灯明と副題がえられていた。これは社説「死人の孤独と不安」に対するもので、ある老婆の話についてであった。そのなかに「私どものように身寄り少なく、ツメに灯をとす思いでためたわずかの貯金では、すごい物価の上昇にはないよりましなくらいのもので、死後の保障にはありません。……希望者にのみ法律で安楽死を認めて下さいますなら、心細い老いの坂にも水銀灯がともった思いをするのは、あのお婆さまと私だけでし

ようか。安楽死を許されれば、それを利用しなくても、いつでも神さまのもとに行かせていただけるという安心感のために、さびしさにも希望がもてるのではないだろうか。」とあって、むづかしい問題を提出しているのである。ここにあるものは一人の涅槃を求める姿を示しているとともに、現代に生きるもののもつ孤独と不安と現代の涅槃のあり方をあらわしているのである。これに対して多くの反響がよせられたのであるが、「利用しなくても安心感をもつ希望がもてる」とあるところに、現代のかなしみを感じるものである。

さて、ここにしるした哲人政治家と詩人と一老婦人について、いわゆる涅槃に関する各々の理解を知ることができると思うのである。すなわちこの人々によって示されたものは知識者の理解と名もなき人の理解とである。

宗教は死より生を求めるところに生れたものである。釈尊の菩提樹下のさとりも老病死についての冥想からはじまったのであり、法然上人もその死の苦しみの求道の生活から生の念仏の生活へと歩まれたのである。死よりはじまった生の生活の終着が涅槃であるが、その涅槃をただ死と考えることを超越して、涅槃を生と考えるところに宗教の真髄があるといえるのである。

新しい年をむかえ寒に入り、節分もすぎた立春となり二月も半ばとなった頃、釈尊像を拝したりその図をかかへて遺教経を誦する声が寺々から聞えるのである。このときに、古い昔の釈尊の涅槃を思い、法然上人の教えの言葉を聞くとともに、現代人に理解せられなければならない、涅槃の真意を味わうべきである。宗教というものは聖者でも知識者でも名もなき人でも共に手を取りあってさとりへの道を歩むべきものである。さとりへ至る門がすなわち涅槃であると考えるところに現代人に理解することができるとある。このように考えて釈尊の教えや法然上人のお言葉を、涅槃会に心より味うことによって、ともにさとりへの道を歩みたく思うのである。



き

『比叡山へのぼる』(3)

上人は菩提寺の住職かんぎやくとくしやう観覺得業のもとへ引きとられたが、得業は上人の偉才を認め、一日も早く中央に出て修業をし、立派な僧侶になるようにと勧めた。そのため一四五年(天養二)上人は故郷を後に、当時の仏教最高学府であった比叡山に登り、得業の学友であった持法房源光の門に入った。しかし源光は一目見ただけで上人の聡明さに驚き、学問の権威者として有名な皇円阿闍梨こうえんあせりのもとで学んだほうがよいと考え、上人をつれて皇円をたずねた。一二四七年(久安三)上人は出家の本望をとげ、天台宗の学問をすることになった。



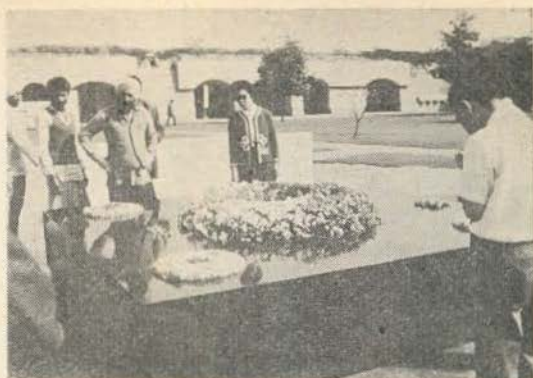
『南都の遊学』(4)

上人の求めたものは、どうすればさとりを開くことができるかということであつた。そのため一一五〇年(久安二)皇円に暇を願ひ、西塔黒谷の慈眼房叡空の庵に入つて、静かに学問をしようと考えた。叡空は喜んで上人を迎えたが、ここでもその目的を果すことができなかった。そこで上人は叡空のもとをさり、嵯峨の清涼寺に籠つて七日間お祈りをした。その後南都(奈良)に遊学し、法相宗の藏俊・三論宗の寛雅・華嚴宗の慶雅をたずねて教えを乞うたが、どの教えにも満足することができなかった。

松壽達文 絵
玉山成元 文

《ニューデリーへ》

二十四日。遮断機のあった国境を過ぎ車は田園を走り、農村を走って行く。泥の壁の家々がこちや／＼とかたまっている部落を幾つか過ぎる。家の近くに大きい水たまりがあり、そのまわりに牛の群がいる。小高い丘には昔の領主の館らし



《ガンジーの墓》

インドでの旅日記

第七回

佐藤 治子

《デリー大学研究室》



い建物が見える。今は古びた姿となり残っているだけ。制度は変っていても農村の、そして農民の日々の生活は同じで月日は流れて行く。
だんだんニューデリーへ近づいていく。道路から少し離れて右に、左に近代建築の工場が見えて来た。自転車へのっている人も多くなってきたし、すれちがう車もふえてきた。



朝から案内人のシンさんの顔が明るい。いつもおだやかでニコニコしている人だけど、ひげをはやしている顔が気のせいとか小ざっぱりと見える。デリーの中心街へと行く橋の手前を左へ廻り、二、三階建てのアバートの径へ入り、ある一軒の門の前で止まる。笑いの止まらぬといった顔のシンさんは、身軽に車のドアを開け「先生、私の家へ一寸お寄り下さい」といいながら、ウキウキと私達一同を案内してくれる。シンさんは家族にも久々で会えるし、私達を喜ばせもする、この計画をそつとたてていたにちがいない。それであの笑いのとまらぬような嬉しそうな顔をしていたのだった。

息子さんや娘さんがお父さんを迎える。奥さんも、背の高い長男も、同居しているらしい身内の人もニコニコと出て来る。シーク族独特のあの切れ長の目の息子さん達のチョンマゲに似て、頭の上でお団子のように髪をまるめて結わえてあるのに気がついた。シンさんに何かうながされ部屋を出て行った息子さんは、暫くするとターバンをまいて現われた。子供達も青年達もああしてチョンマゲのように毛をまとめ、ターバンをまいているのを初めて知った。

そういうば、シンさんは一日中ターバンをまいたまま、夜

になるとあごからほうたいのような布を、ターバンの上から頭の上へつり上げて結んでいるのをみた。大切なあごひげを夜ねる時、お行儀よくさせておくためらしい。シーク族の人はあごひげとターバンとが不離のものらしい。

シンさんの家へと曲る時、タクシの運転手二、三人が客待ち気に立っているのを、ちらとみたが同じようなおひげさんで目は切れ長ですると、ターバンの形が舟形である。シーク族の人が何人かよると、何となくするどい空気を感じるのはあの目のせいであろうか。シーク族自体が自分達を守らねばならぬ立場から戦闘的な種族であつたので、その血を受けている子孫にも、そのような空気をかもし出すのかも知れない。シーク族である者はシーク族だけの寺院があるし、結婚も同族同志でなくてはならないらしい。身につけるものも約束があつて、今でもうでに金具の環をはめている。「三つのものは必ずつけていますよ」と説明をきいていたが、インドに留学された佐藤良純先生に念のため伺ってみると、五つあるとおっしゃる。先生は五つが「K」で始まっているもの、即ち、

- 一、ケイシャ *kesa* — 毛をからない
- 二、カッチャ *kaccha* — ズボンの事

三、カラー kara — 金具のうでわ

四、カンガ kanga — へちま

五、キルバーン kirpan — 短剣

と教えて下さった。シンさんは腕輪を確かにはめていた。インドで三つと話して下さった人は、確かにどこかに短剣（本物でなくても）のようなものは持っていますよ、といっておられたが、シーク族の人達の掟は、今でも守られているらしい。男子の武装に対して、女はズボンをはいたのが、今でもパンジャンブドレスとして婦人達がいっていたし、女の子のズボン姿に薄いベールのようなものを軽く肩から着流している姿は、サリーと別に愛らしい。シーク族のことに興味をもちシンさんにもよく話してもらい、エージェントのインドに詳しい上坂本さんという人にもきいた話である。「シーク族というよりシーク教徒ですね」といわれた良純先生の「五つのK」に又々一段と興味をそそられた。毎日の生活はのぞけなかったにせよ、一生懸命もてなしてくれたシンさんの家族が、皆門まで送りに出て車から手をふる私達を見送ってくれた姿は楽しい思い出である。

《アシヨカホテル》

昔のままのオールドデリーに対し、新らしい都市のニューデリーは道路も幅広く樹木も多い。旅行には十一月から三月までを選ぶべきといわれていただけあって、寒い日本の二月とちがいが暑いといっても、木立の多いニューデリーは緑濃き枝が自由に伸び張り、走っていても実に気持ちよい。木立の中には、うしろな住宅も見え、アパートも近代的である。官庁街を右に遠見しつつ、車は広い道路を走り大きな高層ビルに沿って大きくターン。アシヨカホテルに着いたのだ。車寄せに出迎えるボーイも王朝風の風俗をしている。

部屋割を待つてロビーの椅子にこしかけている私達の前を、ヨーロッパ人、アメリカ人、そしてその間をサリーの美しい婦人達が裾をひるがえし通って行く。さすが国際都市であり、国営の大ホテルである。部屋の番号をきいた玉山夫人と私は急いで美容院へ行く。シンさんの家へ招かれたため到着時間がおくれ、美容院もすぐ閉店するという。日本を出て初めての洗髪である。私の係りは外見スマートな三十代の男の人。「英語で話しましょうかフランス語でいきましょうか？」という。英語だってインドの人のしゃべり方はアクセントが強く聞きとりにくい私は「とんでもない。フランス語なんて！」。話してくれる所によるとフランスで美容を学んだ

ということである。期待にはずれフランス流もあまり上手ではなかった、けれど久々に頭がさっぱりと軽くなった。

ロビーを横切り、美しくかざりたてた宝石や、布地や、靴や美術品の店等々を通る。カルカッタのホテルの店とちがい、入口に立ってお客に声をかける人もいないし、思わず見とれてしまう位インド産の宝石が、ほの暗い道路に面したウインドーの中に燦として輝いている。横目で見て通る私は旅行着に軽い靴。対照的な自分の姿が変に目につくような気がする。「この辺よ」といいながら部屋番号を見ながら行くと、立派な風采のボーイがにこやかに迎えてくれ、部屋に案内してくれた。これが私達の部屋のボーイ長であつた。鳥の羽のような形の帽子がかわいい。

部屋の中には冷蔵庫もあり、心地よい椅子、洗面所のお湯もふんだんに出る。有難きかな。水のあんなに不自由な、お風呂もろくに入れなかった旅路を考えると、何というちがいだろう。びんに入れたのみ水もひえている。でも私はお茶をのみたい。ニコヤカなボーイさんに熱いお湯をと注文すると、銀製のポットに、何と熱さが直接手にふれぬようにと小型のフキンまでそえてもって来てくれた。固型燃料もこれから再び不便な土地で必要であろうことを考え大切にとってお

こう。限りのある持ってきたものを、いかに無駄なく使えることをソヴィエトで、そしてインドで痛切に味わって、ここまで来た私にとり、この滞在三日間は頭をつかわずにすみそうだ。あたりにビルの並んでいないホテルの前方を窓より眺めながら日本茶でのどをうるおした。

◇ ◇ ◇

内田夫人に電話する。「ああ小母様。どんなにお待ちしたことでしょう!」「何か御不自由なもの?」となつかしげな歓迎に、私はどんなに嬉しかったことか! インドへの出発前、どうしても席がとれないというエージェントのたのみで日航の知人にたのみこみ、ニューデリーよりバンコックへの席がとれた御礼もしなくては、ブツダガヤの法要の時の法衣式服は一まとめにして日本へ送り返すことも、こちらの日航の人に手伝ってもらわなくてはならない。日航の支社へ電話する。特に紹介された人は「これからすぐまいります」とのこと。こんなにも友人の、あるいは知人の親切が嬉しく、しかもここに住まっておられる人々の心あたたまる歓迎で、私の疲れも消えてしまうのであった。「夜分空港へ行くまで家で休んでいました」と海岸ではくゴムぞうりをはいて、奥さんと二人で日航の人が訪ねて来られたのは一休みした少し

後である。氣どらない、いかにも明朗なその御夫婦の、好もしき人柄に私達二人は旧友に会うような親しさとなつかしさを感じるのであった。

《日の丸の旗》

二十五日。午前中大使館に行く。主人の甥の奥さんの従兄さんが参事官で来ておられるので挨拶に伺う。大使館の運転手があればどの国、ここはどこと説明をしてくれる。大使館の所在区域らしく、いづれも広い土地にそれぞれの国らしき建物である。最も大きいのはアメリカ大使館。

さて車は門に入る。日の丸の国旗！ なつかしきかな。アッ、菊の御紋！ 官邸の玄関の上に大きな菊の御紋がさん然としている。何とかかんとかいう連中もいる、けれど日の丸の旗を外国でみる時の感激は口でいえないと、郵船の方がいつていらしたが、「ああ我が日本よ」と何かしら胸が一杯になる。皆さんにも久々に仰ぎ見る日の丸をみせて上げたいと思うことしきり。受付も参事官の秘書もインドの人。その中で日本の若い外交官の姿がちらと見える。建物も気のせいかわ落付いているし、廊下もきれいだし、参事官の御部屋もしつとりとしたものを感じる。ネパールの王子様の御婚礼で大使

は出張中で参事官は忙しそう。参事官となつかしの日の丸の旗を入れて写真をとり大使館を辞す。

◇ ◇ ◇
明るい感じの内田夫人は午後部屋へ来て下さった。半日を買物に案内して下さるのだ。一度行ってみるとよいですよと、ショッピングセンターへ案内して頂く。各州の物産を売っている区域である。あるわあるわ、目うつりする位の布地やかざり物。ここは絶対まけない、けれど安心して買えるという国営の店である。時間があれば並んでいる各州の店一軒々々をみて歩くのもおもしろいし、国状も分る。けれど、二、三軒入ってみただけ。インドならではの宝石屋へ行く。立派な店には宝石が美しく、また数多くケースの中で光っている。ここは安心して買えますよと、若い夫人はすばらしい英語で店の者の説明の応答をされる。ある店でこの夫人がベラベラとまくし立てて、ボンボンとおこったふりを見せられた。あとで「小母様。笑わないで下さいね。この調子でないと駄目なのですよ。よい顔ばかりしていると、ちゃんとだまされているんですもの」と笑いながら、しっかししていなくてはいけない理由を話して下さった。

御世話して下さった御礼にと、夕食に来て頂くことにし

た。オールドデリーの有名なモチマール料理店で鳥の御料理を試食する。内田夫人は会食に出られることが多い。私と一緒にいられる間にも自宅へ電話して留守番のお子さんに「ママはもうすぐ帰るからおとなしくしていてね」と優しく話されていた。

インドの習慣で召使いの仕事が分けられているため、日本では考えられない位人をやとわないわけにはいかないらしい。たとえば、掃除はするが床はふかぬ。床はふいてもテールは他の者がふく。私の友人の一人が面倒くさいからと掃除もテールもさっさとやってしまったら、あとで大変バカにされたといっている。外交官ともなると一国の代表の大使館勤めである以上、生活に必要な種類に分けて人をやとわなくてはならない。私達旅行者はよい、けれど職務上他国に住む以上は郷に従えである。大使と一緒にネパールへ出張中の御主人の留守中は、各国の外交団とのつき合いから召使達にも気をくばり、また私達のような友人関係の人も訪ね世話もされる。実にたくましく心強い。日航のマークの入った車を飛ばして来て下さった御夫婦も、また同じにそれぞれ他国にての生活にとけ込んでいられる。ビニールの袋一枚も尊いんですと、いってためておかれた空袋やひもまで荷造

りの足しにと下さった時、ふっと涙が出そうになった。「会に出て御主人や奥さんの席の前でつがれる水をのまぬわけにいきません。時々ひどい下痢をしますよ。仕方がないです」とは参事官の御話。

明日は市内見学。そしてデカン高原へ。竜樹菩薩のおられたナーガルジュダコンダへと、行くことになっている旅の中間のデリーでの一日は無駄ではなかった。この国の習慣や生活のあり方、商人のたくましさなどをきいたり、みたりすることができたのである。

(写真は前田孝雄氏の撮影による)

昭和四十五年度特別会費納入者芳名

金壹万円也	巖谷 勝雄	金貳万円也	成田 有恒
金壹万円也	大河内隆弘	金壹万円也	野村 宗春
金壹万円也	北川 一有	金五千元也	服部 仙順
金壹万円也	栗本 俊道	金壹万円也	前田 成孝
金壹万円也	後藤 真雄	金壹万円也	真野 竜海
金壹万円也	柴田 敏夫	金壹万円也	松川 文豪
金壹万円也	戸松 学英	(敬称略 五十音順)	

たびたび「浄土」文化講座の案内をいただきながら、つい出席できず一筆とらせていただきました。

法然上人開宗八百年、小さな力を集めて偉大ならしめるところに意義があらうと存じます。上人のような方一人の出現より、私共のような者千万人の口からの念仏、これが弥陀の本願の精神だと思えます。またそのことを法然さまがご教示された浄土宗、誠に一人だけで悦に浸っている訳けにまいりません。

世のすべての人達と同じ気持ちになるのはどうすればよいのか、どう説明すればよいのか。ここに衆知を集める一大運動の展開がなくてはならないと思えます。

毎日紙上を賑わせているものは、念仏運動でなく、角棒や



水と念仏

=東京都町田市在住=

中原直治

一株運動であります。このような運動を沈静させるのには、企業家や政治家に、まず念仏の真意を知らせなければならぬと存じます。

既に完成された僧侶や信者だけの集いとなつては、心細い次第であります。

それにしても知恩院でのお手つき運動や、開宗八百年記念の文化講座、またこの前に行なわれた横浜市民会館における講座（椎尾大僧正御出席）は、一信者として大変うれしく思いました。

とに角、私達凡夫に判らせるのには並たいていのことではありません。「信じて尚信すべきは」とか「罪人なほ生る況んや善人をや……一念なほ生る況んや多念をや」、この意

味を悟るのに私は六十年かかりました。しかし耳がタコになる程聞くことのできた私ですが、まだ今でも、極楽へ行つて、帰つて来た人に接することがないために、まだ本物とはいえないかも知れません。

宗教というものは、 $3+2=5$ というような式ではあらわせません。 $3+2=x$ となるのです。どうしても $3+2=5+x$ の式にまで到達するのが理想と存じます。

私は現在七十歳ですが、 $2+3=5+x$ 、この式を本心から信じ人にもいえるようになったのは、無言の大説法、水の法則を信じているからです。法然さまは吉水上人とも申されしておりますが、今では水の教えは、このまま吉水上人の教えと思っておりますので、あまり本を読まず、何も判らない私ですが、水のことならば私には判りますので、この水の教えが吉水上人の教えと合致しているならば、こんなうれしいことは私にはありません。

信越国境を毎月往復していますが、車窓に展開するあの風光、谷川に水の流るるを見て涙する者であります。そして水そのものが念仏であつて欲しいと思うようになりました。法然さまは日に六万遍の念仏をされたと聞いております。またある和尚さんは日に三万遍とも聞いております。生活を持つ

ている私達には到底できません。

しかし、水分の中なら容易であります。私達の脈搏も健康体の人ならば、一脈一念と致すならば一日二十四時間で八万六千回となります。

それはそれとして、何故に念仏と水を組み合せたかという点について、少々述べさせていただきます。私は六十年近くさかのぼりますが、私の叔父は浄土宗の大坊主（体重は二十貫、ことに四頭部は偉大にして、帽子は市販にはない位）であられました。その叔父のある日の説教を思い出すのです。

ほとけさまというのは、解る、解るといふことばからできたのだ。ご覧なさい、水はいろいろと姿、形を変え、氷はわだかまり・もつれ・頑迷に例えられる。これに熱を加えると解る。つまりむづかしい問題を解決したり、判明したりするのをホトケたという。だからほとけさまというのは、この世の中は勿論、あの世のこと、過ぎたこと何んでもかんでも皆知っておられるのです。また、門前の仁王様や神社の唐獅子をご覧なさい。一つは口を開け、一つは口を閉じている。生れるときは「アー」、死ぬときは「ウー」、これを「アーウン」という。念仏もこの「アーウン」からできている。ということ誰にも、どこでもいえるよ

うにされているのである。学校の先生や私達の説教も、皆「アーウン」である。仏心をもつての言葉は、すべて念仏に通ずるのである。私達の良い言葉や、人のためにする言葉はすべてこれ念仏である。易修易業の御慈悲である。皆さんの中に、口を開けたまま「ム」といえる方があるのならいってごらん下さい。

その時、一人の婦人（あとで天理教の信者だと聞く）が立ち上って、アーアーと頓狂な声をふり絞って踊り出し、内陣まで入り込んで、あの大鐘をゴンゴンたたいたので、皆びっくりして静めました。が、「ム」の発音はとうとうできまませんでした。そんな六十年前のことが、つい先日のように思い出されます。

いろいろ述べてまいりましたが、私がいいたいことは、水の一滴の中に仏心が宿されており、私共一人々々の心の中に、それと同じように仏心があるのだということなのです。願くば我等は大同融和して、水の流れの如くその美と力とを発揮したいのです。水は念仏は、到るところにこの美と力を発揮しております。

私は、これを水心五則にまとめあげて二十五年、念仏と共にこれを奉唱してまいったのであります。

単なるこじつけだといってしまうばそれまでのことですが、念仏を理解する方便としていかなものでしょうか。釈尊は経文の解説に多くの譬えをもつて、凡夫に判らせようとしております。ですから私にも、仏心ありというならば、水の譬え話に終らせたくないであります。最後にその水心五則をあげ諸先生方の御批判をと思います。

水 心 五 則

一、自ら活動し他をも動かす者は水なり。

曰く 健康第一 率先垂範是也。

一、常に己の進路を求めてやまざる者は水なり。

曰く 創意工夫 一日一進是也。

一、障害に遭遇しては益々其の勢を増し

これを突破せずんばやまざる者は水なり。

曰く 不撓不屈 難関突破是也。

一、遂には大海となり清濁併せ呑む者は水なり。

曰く 寛仁大度 慈愛包容是也。

一、雨雲氷雪露霞霧霰なるもその本質を失わざる者は水なり。

曰く 与而不求心 即是水心也



道

吉水の庵室

高橋 良和

知恩院の南、円山公園の東の端に安養寺という寺がある。安養寺は宗派からいうと時宗に属する寺である。安養寺の山号を慈円山というが、円山ということもあるので、その円山をとって、京都の名園円山公園が出来たと思うのである。

比叡山を出られた法然上人が西山広谷の地に庵をむすばれたのであるが、その後、京都東山の吉水の地に移られるので、そのことについて古徳伝には

諸方の道俗を化せんがために、承安五年の春、行年四十三にして、黒谷を出でて吉水に住みたもう。

とあるが、その吉水の地がこの安養寺のところである。安養寺はもとは名利であって、かなり末寺もあったように寺伝ではつたえている。

然し今は規模も小さい町の寺で、門を入ると、まだ新しい石橋が目につく。最近新設されたものであるが、この石段をのぼりながら、吉水の庵室にあった法然上人のもとへ、親鸞が訪ねてくる、そのときのことを偲んでみた。

四国の流罪から許されて勝尾寺、そして、この吉水庵室にかえられた法然上人のもとへ、同じく比叡山で満たされるものをつかみ得なかった親鸞がかけつけてきて、選択本願



念仏集を付属されるのであるが、その時の親鸞の心、そして自己のすすめる念仏の真髓をつたえられる法然上人、日本仏教の二大巨星の出会いが、この安楽寺なのである。

このとき親鸞は、この偉大なる師、法然上人にめぐり合つて、はじめて自らの人生に光明を得たのであるが、もしその師に法然上人をもたなかったら、果たして今日の親鸞があったかどうか、疑問をもつものである。

この吉水の庵室へは、いろいろな人が訪ねてきたようである。

法然上人に終始帰依した、関白九条兼実公もそうであつたし、一の谷の戦で、世の無常を味わつた熊谷直実すなわち蓮生坊もそうであつた。

また津戸三郎為守といった武士もあるし、陰陽道の阿波介、それに盗人であつた天野四郎といい、あるいは耳四郎の名で知られている極悪人もこの寺の門をくぐっている。

なかでも関白九条兼実公の希望によつて撰述された、選択本願念仏集もこの地で、つくられたのであると思うと、この安楽寺こそ、三十年に及ぶ法然上人に最も縁が多い寺であるといえる。

四十八巻伝には、

建久八年上人いささかなやみたもうことありけり、殿下（関白兼実公のこと）ふかくおなげきありけるほどに、いくほどなくて、平癒したりけり。上人おなじく九年正月一日より草庵にとじこもりて別請におもむきたまわざりければ、藤右衛門尉重經をお使いとして、「浄土の法門開米教誡を承るといへども、心腑におさめがたし、要文をしるし給わりて、自らは面談になぞらへ、且つは後の御かたみにもそなえ待らんと仰せられければ、安楽房（遵西のこと）を執筆として、選択を選せられけるに云々」



とある。但し後の安樂房はやめさせられてそのあとすぐ真觀房感然が執筆している。

それはそれとしても、法然上人一代の大著述がこの円山の安養寺で選述されたかと思うにつけても、安樂寺はもともとと、本宗有縁の人々にとって関心をもってもらってもよいところだと思う。

この安樂寺の境内、といっても安樂寺のすぐ下に弁天堂がある。このお堂も、名利長樂寺も、双林寺も、昔は安養寺の末寺であつたのであるが、この辺一帯を吉水というのである。

元來淨土宗のことを吉水の流れというが、その起源はここにある。

というのは、この弁天堂のうしろに水ためがある。これを吉水の井戸ともいうので、その昔は、天台宗の粟田青蓮院門跡の境内であつたので、この吉水の井戸の水は、青蓮院の關伽（あか）の水として、青蓮院門跡が新らしく就任するときは、この水を汲んで灌頂したといわれている。

そうであるから、慈鎮和尚のことを、吉水の僧正とも呼んでいるのは、この水で灌頂したという証拠でもある。

この水が湧くところから、この辺を吉水と称したのであって、それが法然上人のすすめられる念仏の流れを、吉水の流れというようになったのである。

大谷というのもこのあたりであり、知恩院山上の一心院の前を流れる川を大谷川と称しているが、今日その名残りである。

この吉水の地に三つの房があり、そのなかの中の房に法然上人がいつもおられたということである。当時の門弟は八十人あまり、いつもこの庵室に念仏の聲がひびいていたことであらう。

法然上人の 〔第二回〕 御影像をたずねて

この当麻寺奥院御本尊の法然上人像は宮城県王城寺蔵の木彫像と共に鎌倉時代に製作された数少ない彫刻像であり、その上、上人の彫刻像としては唯一の重要文化財に指定されている上人像の白眉である。この本尊は知恩院十二世誓阿普観が当麻寺に隠退する時に、知恩院から持ってきたものであると伝えられている。これは四十八巻伝に見える法然の熱烈な信者の一人桑原左衛門入道が造ったものといわれており等身大よりやや小さい坐像であって、両手で念珠を手操る姿は王城寺像と同じである。作風は非常に放奔大胆であり、王城寺像のような精巧さは認められないが肖像彫刻としては優れた作品である。誓阿は応安七年（一三七四）に没しているから、室町初期には既に当麻寺にあったことになるが、製作年代については上人在世中に桑原左衛門入道が造ったものとは考えられないが、王城寺像より遅れた、鎌倉時代の末よりやや早い頃のものではなからうかと考えられる。

但し、この像を初めて見る人は常識的に考える上人の面貌と異っていることに驚くであろう。我々が持っている上人のイメージとしては「足引の御影」や『元亨釈書』の「頭圩ニシテ、稜アリ」（頭がくぼみかどがある）の法然頭に代表されるおとなしく、柔和な姿である。（左図②参照）。ところがこの像の面貌は我々が日常思慕し想像している上人の姿とは異なり、非常に強い感じがする。これは王城寺の像も同様であり、初期の肖像彫刻は画像の柔和さと異なり、共通して相当強い表情を示している。

我々がこの像に奇異観をもつのは、あまりにも法然上人に對する先入観が強すぎるからである。上人の伝記をみると、出家の動機、叡山での勉強、立教開宗の決意、旧仏教徒の迫害、流罪等、上人の生涯は苦難の連続であり、よほど性格の強い、熾烈な精神力の持ち主でなければ決して乗り切れるものではなかったと思われる。このように考えてくると上人は試練の一生であったから、厳しい強い性格の現われた風貌の持ち主であったと考えた方がむしろ當を得ているのではないだろうか、そんな意味でこの像は大変貴重である。

（尚、詳細は「法然上人像について」『浄土学』二十八号、望月信成先生の論文を御参照下さい。）

（宇高良哲）

法然上人木像

四十八卷伝所収上人像
(第二十三卷第二段)②



〈奈良県当麻奥院所蔵〉

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四十六年一月二十五日印刷
昭和四十六年二月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三碩学『浄土宗読本』覆刻版

価 1000 円 ㇿ 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不巧の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

竹 中 信 常 著

新刊『選択集に聞く』 B5版・308頁
価1000円・ㇿ150円

発行所 教育新潮社

著者長年の選択本願念仏集の研究・既刊の解説書の集大成、選択集を現代に贈る平易な文面、浄土宗徒必携の好書。

・ 浄土トラクト

近刊『浄土宗のおつとめ』村瀬秀雄著

B6版 本文16頁 価 50 円 ㇿ 25 円

“春彼岸会の施本に好適” 本会発行の

『ひ が ん 会』 春 期 号

新書版・表紙共12頁・価 15 円 (送料実費)

各々御用のむきは早目に本会へ申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-1-16

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番